

2. 岡山平野における正方位方格地割水田の出現

—津島岡大遺跡第9次調査地点検出の古墳時代水田の理解のために—

はじめに

岡山平野では弥生時代の水田遺構については津島岡大遺跡のほか、津島遺跡や、津島江道遺跡、百間川遺跡群などの調査によってその実態が明らかにされてきた。しかし古墳時代の水田遺構の検出例は少なく、後期のものでは津島岡大遺跡、中溝遺跡、南方釜田遺跡で検出されているにすぎない。また、これらはいずれも旭川西岸地域に所在しているため、岡山平野全体の様相をうかがうことは困難な状況にある。このような状況ではあるが、津島岡大遺跡、中溝遺跡では畦畔の方位を北にあわせた正方位方格地割水田が認められ、条里制以前の方格地割水田を考えるうえで重要な資料である。

また、このような条里制施行以前の方格地割水田の出現には地割を施行したと考えられる地域の首長層の動向が反映されている可能性もある。そこで小論では岡山平野の古墳時代後期の水田遺構の分析に加え、古墳時代中期末から後期、飛鳥・白鳳期にかけての岡山平野の小集団の動向を追いながら土地区画の再編成がなされた背景について考察を加えたい。

1 津島岡大遺跡検出の古墳時代後期水田遺構

津島岡大遺跡では今回報告した第9次調査地点のほか、第6・7次調査で古墳時代後期の水田遺構や灌漑施設を検出している。この3調査地点は130mの範囲に東西に並んで位置する(図74)。

津島岡大遺跡の古墳時代前期水田は、水回りを考慮して地形の傾斜にあわせて水田畦畔を作っており、方位を意識している状況はみられない。本報告の11層検出遺構にみられるような状況が一般的である(図40)。

古墳時代後期の水田畦畔は第7・9次調査で検出している(図74)。これらはいずれも水田畦畔を方位にあわせて作っている。また、区画はいずれも方格である。しかし、個々の水田一筆の面積は不揃いで、極度に狭いものも存在する。全体としてはいずれも狭い面積で区画しているといえよう。これは地形の傾斜がわずかに残っていたために、区画の細分がなされた結果であると思われる。大区画の畦畔はいずれの調査地点においても検出されていない。

溝は第6・7・9次調査地点で検出されている。第9次調査地点では東西方向に直線的に延びる2条の溝が平行して掘削されていた。このうち、北側の溝は第6次調査地点検出の溝と接続し、また、走行方向と底面のレベルから第7次調査地点検出の東西方向に掘削された溝に接続するものと推定される。この溝の走行方向は真北から西に91°振れており、ほぼ真北にあわせた東西方向を志向しているといえよう。

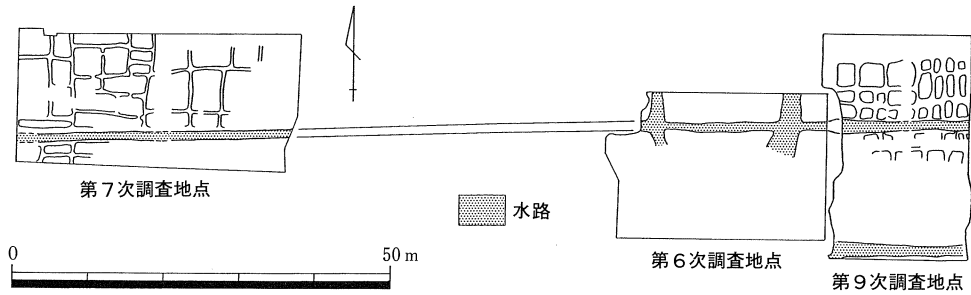


図74 津島岡大遺跡における古墳時代後期水田遺構の状況

以上の検出状況から、古墳時代後期には130m以上にわたって直線的に東西方向に走行する溝が掘削され、その南北には正方位方格子地割水田が広がっていた状況が復原でき、この段階にそれ以前の地形にあわせた区画から方位を志向した区画へと耕地区画が変化したことがわかる。

2 岡山平野における古墳時代後期の水田遺構

岡山平野の古墳時代後期の水田遺構は津島岡大遺跡のほか、内容のわかるものとしては中溝遺跡、南方釜田遺跡のものがある。

⁽¹⁾
中溝遺跡 中溝遺跡は津島岡大遺跡の南約1.5kmに所在する。水田畦畔は東西南北に軸線をあわせ、約10×15mの方格に区画した水田を形成している。水口から出土した須恵器杯片から正方位方格子地割水田が出現するのは5世紀末から6世紀前半とされている。水田はかなり整然とした区画をもち、水田一筆の面積も140～150㎡前後になると思われ、津島岡大遺跡のように極端な区画の細分はみられない（図75—1）。

中溝遺跡の水田畦畔が明確に方位を志向していたのか、局地的な調査のため偶然方位に一致した状況になったのかは今後の広範囲にわたる面的な調査で確認していく必要がある。⁽²⁾

⁽³⁾
南方釜田遺跡 南方釜田遺跡は津島岡大遺跡の南約2.5kmに所在する。ここでは弥生時代以降連続して水田が作られている。古墳時代後期段階の水田も検出されているが、この段階の水田はそれ以前の水田と変わらず、地形の傾斜にあわせて畦畔を作り出している。水田一筆の面積は80㎡前後であり、極端な細分区画はみられない（図75—2）。水田畦畔が正方位を志向して整然とした方格子地割になって現れるのは奈良・平安時代になってからである（図75—3）。古代の遺構面では調査区中央に水路が南北方向に走るが、これは坪境にあたる溝とされている。

3 古墳時代後期の方格子地割水田についてのこれまでの評価

このような古墳時代の方格子地割水田について、都出比呂志や広瀬和雄は次のように評価する。

都出はこのような計画的な土地の再編成について、「すでに開発された耕地を再編成して整

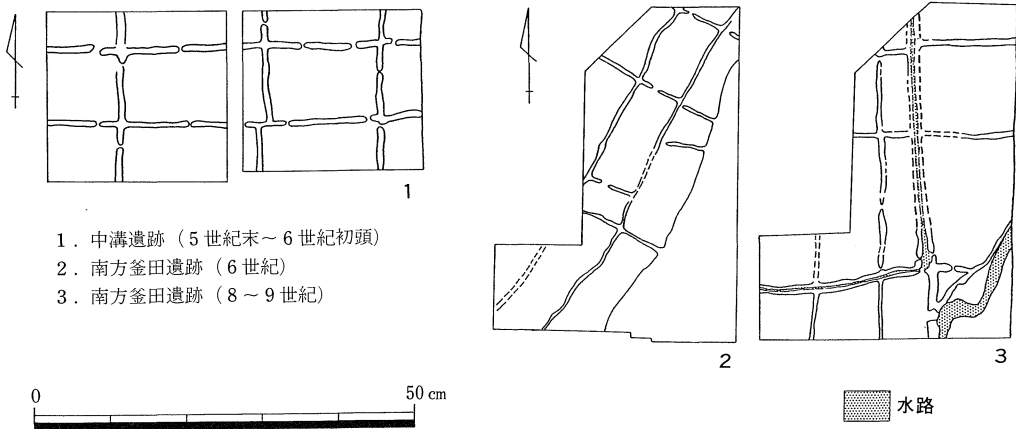


図75 岡山平野における古墳時代後期の水田遺構

然とした方格地割のなかにはめこみ、耕地の境界と面積を正確に決め、農民の耕作地を割り付け、租税を通じて支配することを第一の目的としたことは間違いない。」「さらには、有力首長層が所有する耕地や屋敷地や寺院などの領有関係を確定し、土地にたいする権利関係を調整するうえでも、このような統一的な地割は不可欠となる。」「七世紀以前において、有力首長層による小地域単位の方格地割の設定を認めれば、むしろこの第二の側面こそが、大規模な統一地割施行の最大の目的であったと考えられる。」とする（都出1989 p. 90—91）。

また、広瀬は大阪府長原遺跡、城山遺跡の7世紀の方位に沿った区画水田の分析から、こうした水田が「米の新しい収奪方式と、それを実現する水田形態が試行された」ために出現し、それは『「国家」主導型開発の中心地域で、「官営実験農場」が設けられたということになるのか。』としている（広瀬1991 p. 33—34）。

根木修は吉備の古墳時代水田について分析し、古墳時代後期のこのような正方方位格地割の区画原理を「5～6世紀に朝鮮から伝えられた新来の文物とともに水田の造成・経営技術への新たな技術導入が存在したものと推定され、この時期『日本書紀』に伝えられる吉備の反乱伝承に伴う朝鮮との直接交流などからしても、旭川流域の先進地域に正方方位格地割が存在することは、それはそれで十分に納得される状況にあった」（根木1992 p. 413—414）として、このような方格地割の出現が朝鮮からの技術導入によるものと考えている。

それでは渡来系集団が津島周辺に移入してきたことを示す考古資料はどの程度存在するかみてみたい。津島周辺では上伊福九坪遺跡で陶質土器高杯蓋が、南方遺跡で軟質土器が出土しているが（亀田1997 p. 133表1）、今後の調査で渡来系要素の強い遺跡が発見される余地が残されているとしても、遺構・遺物からみる限りこの地域における渡来系集団の存在は稀薄であった可能性が高い。

また、都出や広瀬の主張からは古墳時代後期の耕地の再編成は首長層、あるいは支配階級が支配や収奪の強化を目的として行ったものであることが考えられる。そこで次に古墳時代後期における岡山平野の地域集団の動向について検討を加えたい。

4 岡山平野における地域集団の動向と耕地再編の背景

(1) 岡山平野における地域集団とその動向

古墳時代の岡山平野では基本的には河川や山塊、海岸線によって分断された小地域を一つの単位としていくつかの集団が存在していたと考えられる(図76)。

岡山平野の小地域をみると、①笹ヶ瀬川下流域の吉備中山、矢坂山で囲まれた地域、②笹ヶ瀬川上流の小盆地、③旭川西岸の沖積地、④旭川東岸の龍ノ口山、操山で囲まれた地域、の4小地域に分けることができる。

地域集団の動向については集落遺跡、墳墓、寺院などをあわせて考える必要があるが、岡山平野では古墳時代の集落遺跡については調査例が少なく、不明確な点が多い⁽⁴⁾。そこでこれら①～④の地域集団の動向について造墓活動を中心に古墳時代前期から飛鳥・白鳳期までの状況をみていきたい。

まず①地域では前期に中山茶臼山古墳、尾上車山古墳、一宮天神山2号墳などの前方後円墳が連続して築かれる。②地域には目立った首長墓は築かれないが、小規模な方墳、円墳の築造がみられる。③地域には半田山山塊に都月坂1号墳、七つ坑古墳群、平野部に神宮寺山古墳、京山山塊に津倉古墳が築かれ、中期には一本松古墳やダイミ山古墳、お塚様古墳が築かれるなど、前期から中期にわたって連続して首長墓が築かれる。④地域では備前車塚古墳、宍甘山王山古墳、金蔵山古墳が、海浜部では操山109号墳、網浜茶臼山古墳、湊茶臼山古墳が連続してある⁽⁵⁾いは並行して築造される。中期には上の山1号墳や旗振台古墳といった方墳が築かれている。これらの4地域は前期には規模や墳形の差はあるとしてもそれぞれの地域に首長墓を築いている。中期には前方後円墳は③地域のみに築かれ、④地域には方墳が築かれるが、①、②地域では目立った造墓活動がみられなくなる。

古墳時代後期になると、これらの4地域のうち①、②、④地域では有力家父長層が築造したと考えられる小規模な円墳を中心とする古墳群が形成されている。また、①、②、④地域では白鳳期までに寺院が建立されており、これらの寺院が各地域の氏族の氏寺であったならば、①、②、④地域の集団については古墳時代からの連続性を看取できる。ところが、唯一中期に前方後円墳の系譜が認められる津島一带を含む③地域では、中期後半に全長約30mの前方後円墳であるお塚様古墳を築造した後、古墳の築造を行っていない⁽⁶⁾。また、飛鳥・白鳳期の寺院の建立も認められない。この③地域は他の地域と異なり古墳時代中期以降の政治的記念物が全く

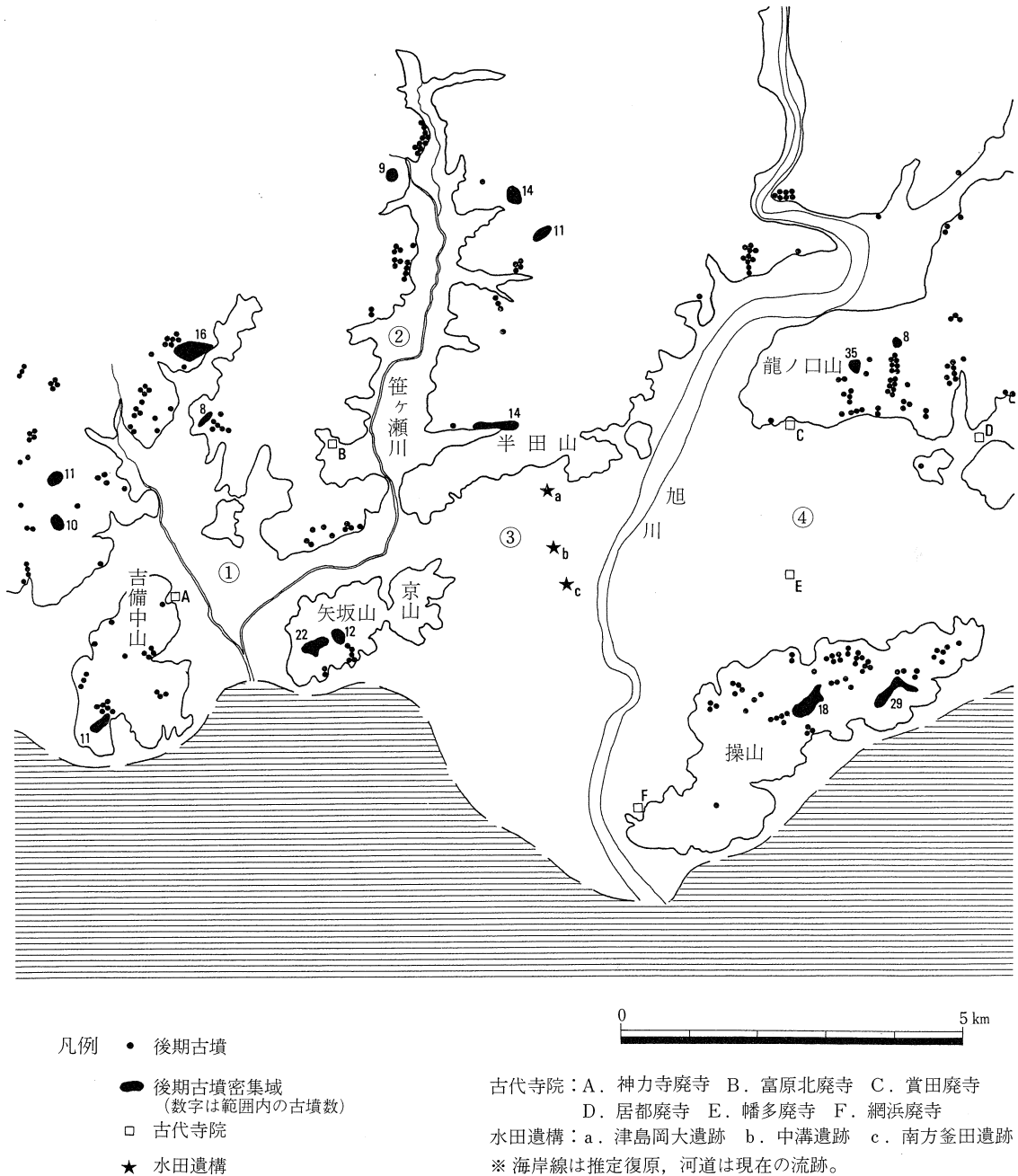


図76 岡山平野における後期古墳、古代寺院、水田遺構の分布 (岡山市教育委員会 1983『岡山市埋蔵文化財分布地図』を参考にして作成)

認められない異質な地域といえる。

(2) 真北志向の地割

方位の問題については、津島岡大遺跡の東西方向に掘削された溝がほぼ真北を志向している

ことはすでに述べた。方位をあわせている構築物の存在は方位を志向する技術や思想の存在の目安になると考える。そこで岡山平野のこの時期の構造物のうち、地域内の有力首長墓と考えられる横穴式石室墳の石室主軸や、飛鳥・白鳳期の寺院で内容の明らかになっているものについてみたい。

④地域に所在する唐人塚古墳は切石に近い整った横穴式石室をもつ古墳時代終末期の古墳であるが、その石室主軸は真北からも磁北からも大きく外れる。同じく④地域の沢田大塚古墳も大形の横穴式石室を有しているが、その石室主軸も大きく真北、磁北から外れている。このほか、吉備地域の6～7世紀の首長墓と目される古墳の石室主軸で真北を志向するものはほとんどない。

また、吉備の飛鳥・白鳳期の寺院で中軸線の判明しているものは少ないが、④地域の事例では、7世紀前葉に建立された賞田廃寺の中軸線は真北から西に9度振っている。賞田廃寺の次に7世紀後葉に建立された幡多廃寺の中軸線は真北から東に1度30分振っている⁽⁷⁾。これはほぼ真北を志向したものと考えられる。

ここで確認できることは、有力な首長墓と目される古墳の横穴式石室においても真北を志向しないこと、7世紀前葉の寺院においても真北を志向しないこと、真北を志向して寺院の中軸線を設定するのは7世紀後葉であること、である。このことから、6世紀から7世紀前半にかけての①、②、④地域の集団には、真北を志向して領域を区画する思想や技術がなかったと考える。このような状況のなかであって、津島周辺の地域はいち早く真北を志向して耕地区画を再編成しているのである。このことから津島周辺地域を含む③地域の特異性がうかがえる。

(3) 岡山平野における正方位方格地割水田の二段階

現在も津島一帯を含む岡山市北半部の条里地割は方位にあっており、津島岡大遺跡や中溝遺跡で検出された古墳時代後期の正方位方格地割水田畦畔がこのような地割の先駆けとなったとみることもできるのかもしれない。しかし、中溝遺跡の南約1kmに位置する南方釜田遺跡ではこの段階にはまだ地形の傾斜にあわせた水田畦畔を作っており、正方位の方格地割水田が出現するのは8世紀である。このことから、6世紀の耕地の再編成は地域全体に及ぶものではなかったことが推定できる。また、津島岡大遺跡でも後の条里に合致する坪境の溝は古代になってから掘削されており、その坪境の溝と古墳時代後期に帰属する層で検出した東西方向の溝の位置は合致しない。このことは古墳時代後期の方格地割を踏襲しない区画の再編成が古代に行われたことを示していると考ええる。すなわち、古墳時代後期の耕地区画は後の条里に連続しないと考えるのである。また、津島岡大遺跡で古代の坪境として機能したと考えられる大溝は、その後明治時代にいたるまでその位置をほとんど変えずに掘削され続けて機能している。方位の問題からは、④地域で古代寺院の中軸線の方位が真北になるのは7世紀後葉であり、条里制

が施行されたと思われる時期に近似することが指摘できる。これはこの段階になって寺院の地割が条里地割に規制されたことを示唆する。つまり古代の条里制こそが道路や寺院、官衙の整備も含めた統一された地割であったことを示している。

以上から、古墳時代から古代の岡山平野では古墳時代後期の耕地区画の再編成という地域内の部分的な再編、7～8世紀の広範囲に及ぶ統一的な条里制の施行という二段階の土地区画の再編成があると考えるのである。

(4) 正方方位格地割水田出現の背景

水田畦畔の方向を正方位にあわせた方格地割水田は③地域に5世紀末～6世紀代にかけて出現している。この地域は当該期の集落や生産遺跡が存在し、中期まで首長墓が築造され続けてきたにもかかわらず、古墳や寺院が造営されない。このことから在地の集団を規制するような政治的な圧力が加えられていた可能性を考えることができる。そして他地域に先駆けて真北を志向する区画を行っていることや耕地の再整理を行うことから、在地の集団とは異なる思想や技術⁽⁸⁾を有する集団の関与があったと考える。しかし、この集団の性格を明らかにする材料は現状ではほとんど無い。また、この地域には支配者層の存在を示す墳墓や寺院も無い⁽⁸⁾ため、このような地割の施行をもって直ちに支配者層による耕地再編とすることはできない。正方方位格地割水田出現の背景については、今後、津島岡大遺跡やその周辺で方格地割を施行した集団の生活域が調査される可能性があり、資料の蓄積を待つて再び検討する必要がある。

おわりに

小論では、津島岡大遺跡の古墳時代後期の方格地割水田が後の条里地割に直接つながらないこと、墳墓や寺院の造営、方位の志向という観点では方格地割を施行した旭川西岸の集団が岡山平野の集団のなかで特異な位置にあることを指摘した。一方で、資料数が少なく、地域的な偏りや調査の疎密が認められる現状での分析であり、正方方位格地割水田の出現の背景については今後の研究課題として残っている。予察的な要素を多く含む不十分な議論であるが、小論が古墳時代後期の方格地割の出現の理解に向けて一つの問題提起となれば幸いである。

小論を作成するにあたり、小林青樹、澤田秀実、津村宏臣、土井基司、新納泉、松木武彦の各氏から有益な助言を得た。記して謝意を表したい。

(野崎貴博)

註

- 1 日本考古学協会静岡大会実行委員会・静岡県考古学会 1988 「中溝遺跡」『日本における稲作農耕の起源と展開—資料集—』
- 2 岡山県教育委員会による1993年の調査では中溝遺跡の隣接地点で該期の水田遺構が検出され、方位に乗っていたと報告されている(岡山県教育委員会1994)。正式な報告ではないため今後の正式報告を待つ必要がある

考察

が、現状ではどちらも評価しがたい状況にあるといえる。

- 3 日本考古学協会静岡大会実行委員会・静岡県考古学会 1988 「南方釜田遺跡」『日本における稲作農耕の起源と展開—資料集—』
- 4 津島岡大遺跡では第10次調査地点において古墳時代後半期に属する竪穴式住居2棟が検出されている。このうちの1棟は6世紀末～7世紀初頭の須恵器片、土師質甕の把手などが出土しており、この時期に属する可能性が高いとされている（岡山大学埋蔵文化財調査研究センター1995）。
そのほか、津島遺跡や津島江道遺跡でも古墳時代中・後期の集落の調査が行われているが、未報告であるため詳細は明らかではない。今後、これらの資料も含めて津島周辺の集落の変遷や集団の性格を明らかにさせていく作業が必要である。
- 5 首長墓の状況からみる限り、この地域はさらに細分される可能性がある。
- 6 津島地域の西に位置する京山山塊の北側は土取りが行われており、その際に破壊された可能性も残るが、仮にそうであっても他地域と比較した場合にはその稀薄さは変わらない。
- 7 岡山市教育委員会による調査の結果では、方位を厳密に測定しうるだけの遺構遺存状態ではなかったが、南大門基礎地形中心と北門基礎地形中心を結ぶ一応の中軸線は真北から東に1度30分振れている（岡山市教育委員会1975）。
- 8 墳墓や寺院が存在せず、集落遺跡の実態も明らかになっていない現状では、この集団の出自や性格にまで踏み込んだ議論はできない。今後資料の増加を待って検討する必要がある。

参考文献

- 岡山市教育委員会 1971 『賞田廃寺発掘調査報告』
岡山市教育委員会 1975 『幡多廃寺発掘調査報告』
岡山市教育委員会 1983 『岡山市埋蔵文化財分布地図』
日本考古学協会静岡大会実行委員会・静岡県考古学会 1988 「中溝遺跡」『日本における稲作農耕の起源と展開—資料集—』
日本考古学協会静岡大会実行委員会・静岡県考古学会 1988 「南方釜田遺跡」『日本における稲作農耕の起源と展開—資料集—』
都出比呂志 1989 『日本農耕社会の成立過程』
河本 清 1991 「山城と寺院の建立」『岡山県史』原始・古代1
広瀬和雄 1991 「耕地と灌漑」『古墳時代の研究』4 生産と流通I
根木 修 1992 「水稻農耕の展開」『吉備の考古学的研究』（上）
岡山県教育委員会 1994 「都市計画道路万成国富線建設に伴う発掘調査」『岡山県埋蔵文化財報告』24
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1995 『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター年報』11
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1995 『津島岡大遺跡』6
亀田修一 1997 「考古学から見た吉備の渡来人」『朝鮮社会の史的展開と東アジア』

図出典（図はすべて再トレース、一部改変）

- 図74 岡山大学埋蔵文化財調査研究センター 1995 『津島岡大遺跡』6、図75—1 日本考古学協会静岡大会実行委員会・静岡県考古学会 1988 「中溝遺跡」『日本における稲作農耕の起源と展開—資料集—』、図75—2・3 日本考古学協会静岡大会実行委員会・静岡県考古学会 1988 「南方釜田遺跡」『日本における稲作農耕の起源と展開—資料集—』